

「未来の教室を考える」試みと子どもたち

Design Based Learning for Children in Future Classroom

佐藤慎也
Shinya Sato

山形大学地域教育文化学部教授 / 1965年生まれ。東北大学卒業。同大学大学院修了。博士(工学)。都市住宅学・まちづくり学習。共著に『まちづくり教科書 第6巻 まちづくり学習』『学生主体型授業の冒険』ほか。第10回日本工学教育協会業績賞受賞

大槌町の学校の復興への兆し

「それだったら先生は〇〇君と話が合うんじゃないかなあ」。

体育館で昼食をとりながら、子どもたちと兄弟の話をしていたときに友だちを思いやる心を感じた何気ない小学5年生のコメント。平成24年秋に岩手県大槌町での仮設校舎で実施した「未来の教室づくり」の模型完成を目前にした子どもたちの楽しげな会話での一コマである。

岩手県大槌町。この町は、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた(図1)。死者803名、行方不明者437名¹。津波による浸水面積は住宅地・市街地面積の52%にも及ぶ²。吉里吉里地区の小中学校を除き、被災した赤浜小学校、安渡小学校、大槌小学校、大槌北小学校の四つの小学校、中学校1校(大槌中学校)は「大槌ふれあい運動公園」のサッカー場に設けられた仮設校舎を使用して授業が行われている。平成25年4月から新しい大槌小学校として統合し、小中一貫校の試行が行われる。平成27年度に小中一貫校を開校し、平成28年度から新しい校舎への移行を目指している。

子どもと築く復興まちづくり

大槌町の小学校での「未来の教室を考える」は、日本ユニセフ協会、竹中工務店との協働プロジェクト「子どもと築く復興まちづくり」の一環としてスタートを切った。「子どもと築く復興まちづくり」は、外遊びとしての「里山プレーパーク」(図2)、内遊びとしての「こどものまち」(図3)、

学校での総合的な学習としての「まちづくり学習」(図4)の三つの柱からなるプロジェクトである。平成23年冬から大槌町、女川町、石巻市、仙台市、相馬市において、子どもたちの遊び環境や置かれている現状について行政担当者、教育関係者、子どもたちの育成にかかわる人たちへのヒアリングを重ねることで地域でのニーズや条件を整理した。学校教育の現場は深刻な被害を受けながらも、被災1カ月後の4月から5月にかけて教育関係者の尽力で建物を間借りするかたち、新たな避難所を確保することで学校を再開したケース、被災を免れた学校に複数の学校が同居する方法などさまざまな創意工夫を通して授業の日常回復に務めていた。もう一方で、子どもたちの暮らしは大きく変化をしてきている。スクールバスを活用しての日常生活は、仮設住宅と学校とをドアtoドアで結び、安全面が確保されたが、道草、町の中での挨拶や声掛けなどの地域とのかかわりは激減した。地域の子ども会組織も集落の仮設住宅への入居の離散化により、機能を失っている地区も多くあることがわかった。先に挙げた大槌町のケースでは約4割の子どもたちが仮設住宅で暮らしている状況にあると伺った。

未来の教室を考える

「未来の教室を考える」については、将来予定されている大槌町の小中一貫校の学校づくりのアイデアに子どもたちの考えを反映できないかというところから始まった。3週間にわたり、計6時間の限られた時間のなかで、地域防災というテーマも含みながら教室空間の創造性を発



図1 | 仮設大槌町役場と被災地



図2 | 石巻市亀が森冒険遊び場



図3 | 子どものまち・いしのまき



図4 | 仙台市立七郷小学校での「未来のまちづくり」



図5 | 未来の教室 普通教室の提案

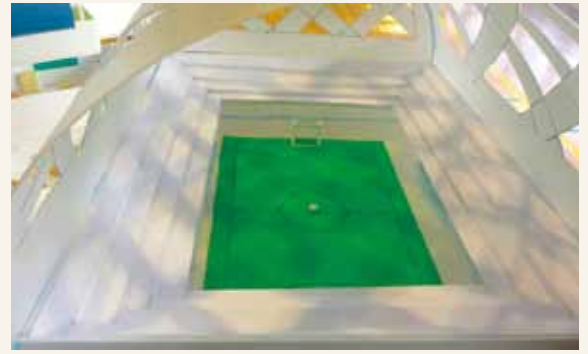


図6 | 未来の体育館「大槌ドーム」[すべて筆者撮影]

揮するプログラムとして授業をデザインした。第一回の取組みでは三つのコースに分かれて防災にかかわる地域づくりに関するセミナー、空間把握のための教室空間の測定、さらにデザイナーチェアによる居心地の体験をクラスごとに移動する形式で行った。授業の後半には18のグループに分かれて、普通教室、特別教室、さらに体育館や図書室などのなかから自分たちのつくりたい空間を選んでもらった。前半のセミナーの要素となった「安全・安心」、「スケール感覚」、「創造性(色・形・居心地)」に基準の軸足を置きながらも、グループで「必要となるもの」、「いらないもの」を加え、教室づくりのための基準を話し合った。第二回の授業では、教室の使い方を図解(ゾーニング)で考え、教室模型の床材や壁材となる部分、インテリアの紙模型を渡して自分たちの形に合うように加工した。なかには当初、配布された四角い床面をあえて円形に変更し、回り舞台のように教室が動く工夫をするグループや、インテリアの紙模型を切り出して教室のレイアウト案をつくり出すグループも現れた。不足したインテリア材料で作成が難しいものは、大学生の手で次回までに用意することにした。第三回の授業では、インテリアの紙模型の切り出し作業、紙粘土による家具づくり、レイアウトの工夫などを通して模型の完成に向けて取り組んだ。時間が不足したために昼食を体育館でとった後、昼休み等を利用して模型を完成させた。

模型に託されたメッセージ

完成後の子どもたちの感想として授業を主宰した教諭の質問に「難しかった」との回答に8割。「楽しかった」との回答に9割の子どもたちが手を挙げていた。子どもたちの模型には、創造的なものとともに子どもたちの過酷な震災体験や避難生活がにじみ出し、さまざまな形で具現化した部分も含まれている。例えば、教室のなかに設置されたトイレ。はじめはどうしてそこに設置したのか不思議に思った。しかし、理由に耳を傾けているうちに子どもたちの避難生活での姿が目に見え、教室の外に出るの

も困難なほどたくさんの人たちが避難していた状況が明確になった。教室の机も、転倒しにくいものや避難生活時にパーティションの役割となるものを選択するグループ、家具をしっかりと壁面に固定するグループもあった(図5)。最後の完成の段階で大槌ドームと命名された体育館(図6)は芝生が敷かれていて、贅沢な体育館だと感じる人も多いことであろう。これも震災前の状況を考えると納得のいくものであった。現在、仮設校舎が建つ敷地には、大槌町の野球場やサッカー場があった。震災直前にグラウンドの整備が終わり、サッカー場には天然芝が敷かれて、子どもたちも4月のオープニングを心待ちにしていた。震災発生後、そこには救助のためのトラックがやってきて天然芝はまたたくまに元の土の土地に戻ってしまった。そうした想いが、大槌ドームの具体的な姿につながってくる。私たちが持っている日常的な常識で物事を見るのではなく、そこに現れてくる事象を素直に受け止めること。それが子どもたちの心に近づくことができる参画に向けた共感的な姿勢なのではと感じた瞬間であった。

震災体験の能動的な伝承者としての役割

大槌の子どもたちの「未来の教室」は、子どもたちらしい自由な発想といった側面だけではなく、防災対策を進める全国の市町村にとって避難所となる学校や地域施設にどのような仕掛けが必要かという幾つかのヒントが隠されているのではないだろうか。それは避難所生活、校舎や住宅の仮すまいという厳しい条件にありながら、社会に開かれた子どもたちの心が育まれてきたことにほかならない。このような活動を通して子どもたちの復興への想いが少しでも伝わるようにまちづくりに向けた努力を今後も重ねていきたい。

注

1. 岩手県総務部総合防災室「東北地方太平洋沖地震にかかわる人的被害・建物被害状況一覧」(平成25年2月28日現在)。
2. 岩手県大槌町「東日本大震災津波復興計画基本計画」(平成23年11月30日現在)p.3。